戦後文学の志（二）

――亀島貞夫『白日の記録』の表現と思想――

栗原　敦

3

亡くなる前年、二〇〇六年十一月二五日の「中野重治・研究と講演の会――没後二十七年」（中野重治の会）で亀島貞夫は「忘れぬうちに」を講演する予定だった。体調不良のため上京できなかったが、事前に講演原稿を用意する習慣に従って、当日は原稿が代読された。[注1] のち「梨の花通信」第53号（07・3）に講演原稿を圧縮したエッセイ「忘れぬうちに」が掲載された。戦後、編集者として初めて中野重治のもとを訪れた際の記憶や、別のある日の思い出など、中野の人物像や伝記上の証言を含めて中野研究にとって興味深い事柄が種々語られているが、いまここでは、敗戦後の「レムパン島抑留のある日」に読んだ中野の評論が亀島に与えた「事件」に焦点を絞らなければならない。

「いかなる経緯を辿ってかは知らず、」たまたま手にすることになった古い一冊の「日本評論」に掲載されていた評論「ペタンと安藝海」がそれで、亀島はかつて書いた自身の一文を摘記しつつ、「そこで、私の心が震えた。――こんな人がいる！　こんな文章がある！」と震撼を記して、さらにこう続けている。

心の震えは、驚きと、ずっしり重い打撃と、しかし、かつてない明るい展望を与える深い敬意を伴って残った。文学に対する、人生、人間、世界に対する、確かな、基本的な、眼がひらかれた。その夜、心は、一九四三年

十二月一日、軍隊入隊以来の暗鬱な空漠が充たされ、解放され、私は充実した満足の眠りに裹(つつ)まれた。

何事かを知り、眼が開かれた経験に相違ないのだが、「ほとんど生理的なもの」であったそれを、振り返り、考え直して、それまでの自身のあり方に対する根本的な見直しを迫るような経験として受けとめている。

むろん「愛国少年」ではなかったとも自認する亀島だが、学徒動員に応じて戦地に赴いている。認識としては「こんな馬鹿げた戦で死んでたまるかと思ってもいた。軍隊は私の考えの誤りでないことを正確、深刻に教えた。」しかし、振り返って、自身のあり方としては、「私は、兵士として、後に最下級の将校として、無能である以上に、精神において、忠実でも、真摯でもなかった。「共匪」(マレー共産遊撃隊)討伐に、密林(ジャングル)を跋渉する日にも、部下の兵士に「戦争はまもなく終る。だから死んではならぬ。命あっての物種。」と告げたに過ぎぬ。／果して、月余にして、敗戦の報が届いた。私は九死に一生をえたのを喜んだが、それもただそれだけのことで、あとはのんべんだらりと帰還の船のくるのを待つほかなかった。」という状態だったと自身評している。

それを「ペタンと安藝海」が摶った。

その時の打撃は大きく、重い棍棒のそれの如くにあり、同時に、漠たる未来を指示する光明の如くにもあり、その後の人生に深く関わった。

この人を敬し、かつ、畏れた。

前後するが、亀島自身への「棍棒」の働きは、「己の在り方、生きよう、世界の出来事、総じて人・事・物にたいする対しよう、それらすべてに関わる、己のだらしなさ、いい加減さにたいする容赦ない打撃、といっていいもの」と受けとめられている。エッセイで省略されている部分を原稿で補えば、次のような表現もあった。

〔略〕先験的な感覚は是非ないとして、知識の有無、賢愚の別をいう前に、どれほど讒(わず)かにせよとりいれた知識を、正確に分別(ぶんべつ)すべき基準のようなものが堅固にあるべきを、それがなかった、それを培い、育成すべき基礎がなかった、というしかない。それは己の生きよう、人間、世界にたいする対しように由来する。

つまりは、甘いもの好きなバカな子供が、口当りのいい菓子を貪り食うように、あれこれ読み散らしはしても、身につくほどの何もなく、そして、その自由から強制的

に隔離されると、出たとこ勝負のいい加減さで、日を過すという具合だったのか、そうだったというしかない。

レムパン島抑留中、二十四歳の頃、「班長として、島の海縁（うみべり）に、大隊の各中隊から派出されてきた二十人ばかりの兵士と、ニッパ椰子の小舎（こや）で、製塩作業に従事してい」た、「とにかく、入隊以来、かつてない安逸、静穏な日々」のある日、「何らの予感、いかなる期待も抱くことなくして」この「ペタンと安藝海」を読み、読み進める中でもたらされた回心、根源的な自己批判ともいうべき覚醒の体験であった。

最晩年における要約であって、主題を中野重治においた一文の中でのものだったとはいえ、敗戦後に試みられた亀島貞夫の文学的営みの（同時に、すなわち「人生」自体の）根幹を貫く精神が、ここに確認されていたことを見逃すわけにはいかないのである。

4

「ペタンと安藝海」は、世上一般の感覚からいえば、中野重治の代表作と扱われる一文ではあるまい。けれども、出会いというものの不思議と、そして、それが小品であろうが生涯の大作であろうが、力あるものが人を搏つのに何の不思議もないという事実とが、若き亀島の体験には示されていた。それにしても「ペタンと安藝海」はどんな一文であったか。とりいそぎの一瞥を許していただきたい。

『中野重治全集』の解題には「日本評論」一九四一年一月号に発表、初出表題は「ペタンと安藝海――楽しき雑談――」で、『楽しき雑談』第四にはじめておさめるとあり、全集では、「楽しき雑談　六」とされている。「双葉山の七十連勝」（初出では百連勝）[注2]が掛かった勝負を前に、双葉山・安藝海の勝者を予想して、予言が予言として通用するための条件に及び、これを話の枕にしてフランスのドイツへの降伏と老ペタンの役割の問題におよび、デリケートな国際関係や外交や、複雑な歴史事情を踏まえた奥行きのある配慮や交渉や駆け引きやの問題に展開して行くエッセイ・評論、すなわちここでの「雑談」である。

一九三七年十二月に内務省警保局から受けた前代未聞の執筆禁止措置が三八年暮れ頃からようやくゆるみ、小説「歌のわかれ」（「革新」三九年四月～）、評論「斎藤茂吉ノオト」（「日本短歌」四〇年七月～）等を発表していった時期だが、太平洋戦争の開始を間近に控えて、検閲に隙を見せず、執筆禁止措置への警戒を怠らず、社会認識の正邪を誤りなく腑分けして真実を伝える「ねちねちした進み方の

必要」（「革新」三九年七月）を身を以て実践していた中野なのである。世事万端におよぶ「雑談」の装いの下に込められた濃密な思いや、鋭い批評の刃が心ある者には感じ取れる文章群に他ならなかった。

文化国家フランスが、ナチスドイツに降伏する（四〇年六月、独仏休戦協定締結。七月仏政府ビシーに移転）。日本のジャーナリズムや識者なる者らが、文化の軍事への弱さをしたり顔に（？）論評する。目の前の一時的な動向の奥に届くことのない世界認識に、全く違った穿ちを加え、アメリカに亡命しているアンドレ・モーロアが書いた『フランス敗れたり』への批評を介在させて、我が国の大政翼賛会の在り方への種々の評判を取り上げながら、宣伝やデマゴギーに含まれる「なめた態度」を摘出し、言葉の役割、意義を語って、ついに以下のように「国の文化の発展」に及ぶ。

〔略〕国の文化の発展ということには、国民の判断力の強化ということが当然としてふくまれてくる。そうして、あらゆるデマの征伐ということには、国民の判断力の強化ということが根本に横たわっているのである。国民の判断力の強化ということを取りのけておいては、一つのデマは征伐されてもそれが別のデマになって生きかえるのを防ぐことはできない。判断力の強化ということはだから根本の問題である。そうして、学問芸術の道は、言葉をとおしての判断ということを性質上重んじるのである。

「国民の判断力」、「学問芸術」、「言葉」を重視して、大政翼賛会の新体制を巡る種々の言説に見える「デマの征伐」に向けて、さらに「判断力の強化」に「文学・芸術が大いに関係あるものだ」と展開し、その判断力の強さとは「肝腎なのは、厄介な事態に面して、ああも考え、こうも考え、またいろいろに想像をめぐらしたりもして、一つの正確な結語へじりじりと近寄つて行く能力ということである。」というのである。

「パリーが陥ちてはツとした」などということがどれほど軽薄であるかと指摘し、「自分の眼で自分を見る力は別個独立に養わねばならぬ」と考え、「直接現物についてみずから判断する癖が国民一般のなかに生れねば力づよい前進は考えられぬ。」とし、学問芸術や専門教育や「正確な結語へじりじりと近寄つて行く」努力を「贅沢は敵だ」式に投げ捨てたがる頽廃を、中野は厳しく批判した。

敗色濃厚な戦争末期に動員され、ドイツの敗戦を追って日本も敗戦を迎えた後の抑留生活の中で、この「ペタンと

安藝海」が若き亀島貞夫に「文学に対する、人生、人間、世界に対する、確かな、基本的な、眼がひらかれた」という衝撃を与えたのは、けだし頷けることなのであった。

5

『白日の記録』の主人公（視点人物）と呼ぶべきは志津堯志である。志津は学徒動員によって召集された幹部候補生、陸軍軍曹として「予備士官学校の課程を半ば了へたところへ、突然転進命令」が来て、一九四三年十二月に出港、以後四六年六月の帰国まで、二年半（三十ヶ月）の軍隊・兵営、抑留生活を送った人物。作品に描かれる話題の焦点は、この二年半の経験だが、合わせて、この「記録」を書き綴る戦後の日々の現在も書き込まれている。

すなわち、作品の叙述は、発表された個々の篇毎にいくつかに書き分けられているのであって、まず、「僕」（すなわち志津堯志の一人称。「僕達」を含む）の語りと、志津を主人公にしつつ三人称的に叙述する場合、そして、篇によっては、三人称的叙述と一人称を交錯させ、また志津の「日記」を差し挟む（一人称叙述になる）といった場合もあるのである。

先に「2」で掲げた各篇の「タイトル」に即して概観すれば、およそ以下のようになる。

1　「白日の記録」　一～一四

◇回想する「僕」による説明、思索、独白をまじえつつ叙述が展開する。

「僕」による戦後の現在からの回想にはじまり、この記録の範囲を提示。改めて体験の叙述に進む。仙台から乗船地博多に向かう。出港、台湾、高雄（二ヶ月）を経て、海南島楡林港外碇泊（一ヶ月）。輸送される兵士「僕達」で記す部分も含んで、輸送船中の劣悪状況、アメーバ赤痢の蔓延を描き、仏印通倫（ツーラン）の港に入り、戦友Mの投身の知らせに、初めて「志津」の姓（名は記述されない）で呼ばれる場面が登場（一～五）。――内地出港以来三ヶ月余。

通倫から馬来西海岸ポート・ヂクソン教育隊へ貨車輸送。――二ヶ月足らず。

教育隊での訓練。一九四五年六月三〇日卒業。兵科見習士官に任官――四ヶ月。

任地は歩兵第四十六師団。貨車輸送、セレンバンを経て一週間後、一四七聯隊二大隊四中隊に配属。翌々日から討伐（「密林地帯に蟠踞する共産匪を掃蕩」）開始。五日目の戦闘を生き延びた経験（六～九）。

《反古になった手紙》の挿入。捉えられた「匪化民の老人」、五中隊のN伍長の振る舞いと、「僕」の思索――二十日余に亘った討伐、最後の日のそれ（一〇）。

思索の続き、「匪化民の百姓」（老人）の場合（一一）。

思索の続き、「連絡員」の場合、「残忍な軽薄さに充ちた」Tの姿、老人の微笑。「一九四七　一〇月の日記」（一二）。

思索の続き、第二次の討伐、「芳蘭伝説」の予告（一三）。

敗戦の詔勅が伝達された日、思索の続き、夜（一四）。

2　「白日の彩色（いろどり）」　行空けによる七段落

◇志津堯志を視点人物とする三人称で叙述。志津については内面描写と内的独白（と呼んでおく）が繰り返し差し挟まれ、これが中心をなしている。ただし、中隊長谷永についても一部内面描写がある。

一九四五年六月、マレイ、ジョホール洲。セデリ・ブッサール川支流の兵営地。志津に過ぎた「二十日余りの時を思い泛ばせ」る午前。「白日の陽の下」に中隊長谷永大四郎が登場。谷永が「新品の見習」士官志津にからみ、両者の精神的対峙が展開（一～三段落）。

土手の上で、準備されるもの。軍医浜崎創の到着。匪化民二人の斬首（四～六段落）。

衛生兵の実習を名目にして、残る一人を軍医に生体解剖させ、見せつける谷永（七段落）。

3・4　「芳蘭伝説」　一～三。行空けにより、一章九段落、二章四段落、三章八段落。これに、「〔蛇足的おわび〕」として、付記が添えられている。

◇志津堯志を視点人物とする三人称で叙述。一章ではじめに志津の回想による内面描写があるが、それ以外では総じて内面描写や内的独白は少ない。二章には回想、内的独白を含む。三章については内的独白がかなり含まれる。

一九四五年六月二四日の討伐（第二次討伐に相当する）。中隊長谷永の指揮で行軍、志津堯志は第三小隊長。休憩中に今度の討伐の前の第四中隊の兵舎から「歓楽」（「放馬」）に引き出された時の回想（「芳蘭」を思わせる者、目撃？）。

行軍再開（一～七段落）、行軍中の谷永、志津の関わりのうちに、数人の匪化民（？）と遭遇、二人射殺、一人（少年）銃撃、捕捉、一人逃走。岩見謙吉憲兵軍曹の説明

「我等は芳蘭を信じる、」。「敵」負傷一名を捕捉。刺殺を巡る兵員達の関係、国民兵の二等兵小谷五六の、刺殺を「厳しく拒否する意思」。現役最古参六年兵、濱島伍郎による刺殺（八、九段落。以上一章）。

「ニッパ椰子で葺いた」山塞の兵舎の夜。少年を拷問する昼間の回想、敵機来襲の警戒呼称、昼間山塞（潜入諜者の）を発見した時の回想（一、二段落）。

山塞での警戒体制、来襲、捕虜の逃亡。小谷の昏倒（三、四段落。以上二章）。

翌日、密林の行軍。前夜の回想。逃亡された少年捕虜捕縛の場所に記されていた「芳蘭」署名と小谷昏倒に対する谷永の不審。小谷に注意せよとの指示。志津の小谷に対する認識、十一時七分。再び前夜の回想、兵営での蠍（一～四段落）。

行軍、密林から萱原へ、斥候榛野鼎曹長の報告、小屋四つ、畑を攻撃、小屋から逃れた「小柄で、華奢な」者、「女」を追う。密林に逃げ込んだ後を追う。相手が倒れ、瞬間、相手に先にコルトを構えられる、「芳蘭」との邂逅。全てを見通されており、戦争の近い終結を予告され、撃たれずに終わる（五～八段落。以上三章）。

「〔蛇足的おわび〕」の付記――、まさしく「マレイ・ジョホール地区共産遊撃隊指導者・芳蘭」であったこと。捕らわれた「連絡員」、「凄惨極まる拷問」の後にポリスによって刺殺。殺される前のことば「来たるべき日を待て。我らは芳蘭を信じる。」小谷五六の脱走。ジョホール・バルの夜、ポリスの刺殺（芳蘭の関与？）。第三次討伐。第四次討伐（深夜、密かに小谷が芳蘭の志津への手紙を渡す。「来たるべき日は既に近い」）。第五次討伐。終戦を密林の無電で聞く。連合軍の指示を待つ。ジョホール・バルに入る遊撃隊との交渉に、四度、芳蘭に会う。移動、「ジョホール・バルから糧秣・被服を搬ぶ遊撃隊。指揮の鞭をふる芳蘭。」別れの挨拶、握手、「……一九四六年五月、帰還船「鳳翔」は俘虜の島、レンパン（ママ）を離れる。」などの項目が、摘記的に記載されている。

【5・6・7の「驢馬の列」（一～八）・「傷痕」（九～一二）・「時は停り……」（一三）は、章が一から一三まで連続しており、一体のものと考えられる。】

5　「驢馬の列」一～八。一～五章は「日記――Ⅰ」～「日記――Ⅴ」、六章は「白日の記録――Ⅰ」、七章は「日記――Ⅵ」、八章は「白日の記録――Ⅱ」。

◇日記の章は、一九四九年七月、八月、九月の日記で「僕」（志津堯志）の一人称による記述。戦中、帰国まもなくの回想や、この「日記――Ⅰ」を書き始めた頃を振り返るところなども含まれる。「白日の記録」部分には、「日記」と同じ形式で冒頭に執筆日付と見られる日付が添えられている。内容はⅠが一九四五年一〇月のレムパン島に移ってからの体験、中隊長谷永への「根強い憎悪と忿懣」の理由を語る兵士達の話。僕の思索。Ⅱはある日、前夜に起こった「中隊炊事場」の盗難を巡る話題。

「一九四九・七・二七（WED）」の日記。生き残った自分の現状に対する忿り。「七・三〇（SAT）」の日記（一）。僕の疲労、二十七年と四ヶ月の年齢、「麦の穂のように生きたい。」という願い。三年前、内地帰還の時の回想。大阪の復員宿泊所での眠り、翌朝の路面電車、小学生時代の回想、生きる喜び。対する三年後の現在の疲れ。ある夜の会話、疲れ。復員船の回想。復員時、「僕のあの家」、呉港での全国主要都市災害実況図による確認、帝塚山三丁目、34・35の無事（二）。

「八・七（SUN）」の日記。隣人の雑談、「東京のはずれの小さな薄汚れたアパートの二階の小さな部屋」、「二年七ヶ月いる」。「恋人弓を迎え、去年五月、チビの徹が生れた」。西武電鉄武蔵野線、「頑固で素樸で、ユーモラスで健気なもの」のあることが希望を支える（三）。「八・一一（THU）」の日記。朝および夕の通勤電車での光景と思索（四）。

「八・二四WED）」の日記。二年前の秋「白日の記録」を書いていた。徒労感を押して書いていた。「…僕は書かねばならぬ。書くことが僕の終結なのだ。」という思いと、「どんなふうに書けばいいものか。」という思い。バスの運転手たちの会話、その感想。「仕事を通しての人生へのうちこみ方」、『マルテの手記』の引用（五）。

「九・一（THU）」と付記された「白日の記録――Ⅰ」（一行空きで一〇段落）、「一九四五年一〇月、僕達はレムパン島に移った。」終戦から二ヶ月、「英軍の指示に従い馬来半島南端」を歩き廻り、「クルアンで検査を受け、シンガポールから船」で翌朝、島に着く。急造した桟橋を宝港と呼ぶ。三日目「僕」は大隊の作業隊長を命ぜられる。作業は年末まで続いた（一段落）。連日の作業、「僕達の給与は一日二百五十瓦」の「米粒」、死から解放されながら、飢えに瀕しつつ、「大半は激しい作業に、健気に堪え通した。」（二～六段落）。「中隊長・谷永大四郎に対する根強い憎悪と忿懣」の理由を語る多くの兵士の話。「敗戦直後、中隊にラヤン・ラヤンの鉄道警備」が命ぜられた時の挿話

ほか。飢餓の予感（七～一〇段落）。

「九・四（SUN）」の日記。この執筆を開始した七月二七日からの回顧。難渋への思い、二年前にも同じ思い。「文学に自分を賭けてゐる」のだが、それがどういうことであるか、分からないというしかない苦闘。チビの振る舞いに、人類の「敵」に対して闘う希望を夢みる。「つまり僕は人間が徐々にであることは仕様ないとしても、その代り着実に、階段を一段一段昇つて行くように、より現実的に、より実際的になつて行くことを、強く望んでいる。」

「九・八（THU）」と付記された「白日の記録――Ⅱ」（一行空きで四段落）、（敗戦後すでに三ヶ月余）「ある日、午前の作業を済ませて帰ると、人事掛准尉・佐田六郎がひよっくり僕を訪ねて来た。」実は、「昨夜、正しくは今朝、二時過、中隊炊事場に盗難があつた。」「浜島兵長が発見された」、「尋問」、「自白」（一～三段落）。しかし、不審残る。浜島の「苦し紛れの捏造」という「僕」の意見。「明日、隊長が来ると言つとりましたよ」に反応して、「不快さを剥き出しに」する。それを煙草で紛らす佐田、懐柔される気分。それを振り払う。「しかはあれど、かく羸弱に振舞ふをやめよ！　われらはすべて重きを負ふに堪ふる愛すべき驢馬ではなかったか！……」（『ツァラトゥストラはかく語りき』からの引用。四段落）。

6　「傷痕」九～一二。

九章は「日記――Ⅶ」、一〇、一一章は「白日の記録――Ⅲ」、「白日の記録――Ⅵ」、一二章は「手紙――Ⅰ」。

◇九章は一九四九年九月の日記、「僕」（志津）の一人称。一〇、一一章は、5に続く、レムパン島での作業生活における志津の思索と行動を、志津を視点人物とし、内面描写、内的独白と共に描く。一二章は一〇月二日付で「手紙」をある人物に呈する形で記し、それに引き続いて、自分の思索を要約する「日記」の一部を二カ所（前年の一〇・二五、この年の七・一五）再録する。

「一九四九・九・二〇（TUE）」と付記された「日記――Ⅶ」。ムッシュ・アンドレ・モンターニュへの「僕」のインタビュー（？　編集者としての取材？　九）

「九・二一（WES）」と付記された「白日の記録――Ⅲ」、「中隊の盗難事件」を聞いた夜。飢えから来る規律の緩み、崩れ。「然しこの重すぎる現実の中で、同じ無力を喞たねばならぬなら、すべての美しさは貴重であり、僕は僕自身のそれを含めて、尊重してし過ぎることはあるまい。」中隊長・谷永に進言に行く（一〇）。

「九・二〇（MON）」と付記された「白日の記録――

Ⅳ」（ⅢとⅣは執筆が前後していると見られる）。「一九四五年一二月はじめ」、「皇軍の精鋭」・南方軍の「兵達は斉しく飢え窶れている。レムパン浮腫と命名された奇怪な疾病」が襲いかかる。その中の深夜作業に乱れ・盗難が頻発。規律は崩れているが、崩れ去ってはいない軍隊組織。階級の上下、「要領」の跋扈。中隊長自らの立場と要領の行使。卑しさと侮蔑、「陰湿な沼地」・「薄暗い絶望の底」、「僕達は一つ一つ別々の水溜りに浮ぶ、ひきさかれ吹き散つた病葉」。沼田重吉も「乱梱」から奪い、谷永が便乗。「煙草」に引き込まれ、「僕」もその余禄を受ける。

「一〇・二（MON）」と付記された「手紙――Ⅰ」。通勤時に出会う、弓にもどこか似通うところがある美しい人に宛てた手紙。「幾らか古風」「自己抑制」「健康で素樸な魂の輝き」を語り、次いでなかのしげはる（中野重治）「子供たちと平和」を紹介する。さらに、「日記（一九四八・一〇・二五）」として田村泰次郎の小説「青白い腕」の戦争―平和観に対する批評を引き、続けて「日記――Ⅷ／（一九四九・七・一五）」として小林多喜二の評論「戦争と文学」を取り上げて、それに付された「解題」にも関わらず、「僕は書いておこう。見当外れであつたとしても、見当外れそのものが、時に、全くの無意味ではないこともあり得るのだから。」として、「進歩的」「解放」戦争の肯定に至る論議に、小林の軽蔑する「人道主義者等」と違う「我々」を自認した上でなお、「戦争一般に反対する。」と主張する。レマルクへの批判についても、正しさを受け入れてなお、その「主人公」の「非常」な「憤慨」を「正当なものではないかと思う。」と共感して、戦争の本質を探究するために、それを捨て去ることをしない立場を貫いている（一二）。

7　「時は停り……」一三。

「白日の記録――Ⅴ」行空けによる小さな一五段落。

◇「記憶の混乱」を意識し、単なる「記録」を超えたものを目指す自覚を交えながら、抑留中の、飢餓線上で繰り返される日本軍の組織的「苦難の労役」と日常に焦点をあわせて、おおむね三人称的に叙述する。

「一九四九・一〇・二三（SUN）」と付記された「白日の記録――Ⅴ」。冒頭に「僕」の「記憶の混乱」の自覚、「事実の記憶」の断念、「もはや記録と呼ぶことが正しくないように、新しい勇気とエネルギィをこめて、この記録を一つの物語――暗い、惨めな、それでもやはり間違いなしに間違の――へまで脱皮させ、出来る限りの精確さで、そ

の可能の世界を組み立て、繰り展げるよう踏み出して行こう。」（一段落）。

宝港から三キロ、歩兵一四七聯隊二大隊四中隊。一九四五年一二月末。夜、十一時過ぎ、食欲の誘う話題、「極度の飢餓による睡眠不能が必然的に惹き起す饒舌」、朝、点呼、「飯上げ！」、日直下士の叫び「作業に整列！」、「作業（それは現地栽培と呼ばれたものだが――）」についての「南馬軍司令部」の定見のなさ、繰り返される「兵隊の悲劇」「レムパン浮腫」、復員まで継続する軍隊組織（二～六段落）。

無為の午後、一丁の小刀による「芸術製作」。一人の兵士から「竹のペーパーナイフ」を手渡された記憶（七～九段落）。

水浴、虚脱感、このまま帰還に至らない恐怖、帰還の日、場面の想像、愚痴に終わる繰り返し。夕食、夜。これらを書くことへの幻滅（一〇～一二段落）。

しかし「暗い、惨めな、それでもやはり間違いなしに人間達の物語を。僕は必ずそれを書こう。……僕を凝視めつづける暗い忿り、それが僕を見棄てぬ限り、それを僕が見棄てぬ限り。」（一三段落）。

「英軍口糧『太平洋二四時間レーション』」受領、支給、美味。だが続いて「予期に反して」「飢餓の島」、「あの怖るべく残忍な力を奮う食慾、すべてのおしひしがれた人間の、然も人間であろうとする為の果敢な努力を、抵抗し難い絶望の壁へまで一気に押し流して行く苛酷な飢餓感」が「跳梁」することになるのを予告して終わる（一四、一五段落）。

【8・9はレムパン島に送られて、そこで抑留（駐留）生活を始めた時期を描く。6「傷痕」、7「時は停まり……」とは、時間が前後している。】

8・9「島」1～3

「島」1は行空けによる七段落、2は行空けによる九段落、3は行空けによる一二段落。

◇1は末尾にやや長い志津の内的独白があるが、全体として幾人もの兵士達に焦点が合わせられ、結果として超越的視点に近い描き方になっているといっていい。谷永の内面描写・独白もある。2も、志津の内面描写で志津が視点人物であることは動かないが、太田原軍曹にも、谷永にも、加倉井百助らにも内面描写はある。3も同様。谷永、小谷五六、名和兵曹長にもある。

1は「――一九四五・一一・七」。大発で島に送られる。大隊長・池島少佐、乙副官・本庄中尉、以下四人の中隊長。大隊は整列し、駐留地を探し、「日暮がた、古いゴム林の斜面で」幕営（一、二段落）。谷永大四郎の感想。兵士の会話（三～五段落）。志津の思索、決意、「切り札」は「すべてをなげすてて捉えた札――環境順応力」、「見誤らず、不足せず。」（六段落）。谷永の眠り、兵士達の眠り（七段落）。

2は「――一九四五・一一・八」。「早朝、各中隊命令受領者に集合がかかった。」花森軍曹長、命令読み上げ。太田原軍曹を介して、宝港の道路作業に対して志津に大隊の作業隊長が命ぜられる。太田原、志津それぞれの互いの人物評。朝食、作業班整列、出発準備（一～五段落）。出発、宿営地。神條軍曹の気合、従わない加倉井、崩れ。翌日からの兵舎設営、将校舎を独立させる、兵隊――捕虜、思想の変化についての谷永の言明（六～九段落）。

3は「――一九四五・一一・八～一一」。「今日中に寝る場所だけ作ろう。」、作業は翌日から。貨物廠の倉庫、次いで宝港からの道路作業、予定はほぼ一月。作業する兵士の様子（一～三段落）。起床、点呼、谷永大四郎の心中思惟（四段落）。作業班と貨物廠の兵隊の悶着、貨物廠の兵隊の侮辱に沼田重助が反撃（五段落）。建ちかかりの将校舎、兵士の反応、小谷五六の観察、郷木の煙草を巡る感慨（六段落）。将校舎の仕上げ、谷永、兵士作業、漁獲に行く兵士達、境遇・噂話、加倉井の煙草、頽廃への傾き（七、八段落）。「今、〝島〟を厚くとじこめた夜は、冷酷で残忍に近い。」谷永が炊事小屋へ向かう、兵舎の窓から、非難し、囃したてる歌。「何もかも変りますな。よくも悪くも、すつかり。」、井田大尉が名和兵曹長を呼ぶ。名和が思う、「あれは何かかも知れぬ。八・一五以後の変化、隊にいなかつたほぼ二ヶ月に起つた激しい混乱を通じての様々な形の変化。」「脱走」を振り返る名和（九～一二段落）。

6

『白日の記録』の概要は以上に摘記したごとくだが、略述したように、基本的には志津堯志を主人公・視点人物としつつも、多様な描き方が試みられていた。これらを総合し、最終的にどのようにして統括することが望み見られていたのか。

それを検証するためには、さらに細部にまで分析を深めることが欠かせない。ただ、執筆の現在を反映させようとした「日記」の中で、繰り返し執筆の困難を語らせているのは、単なる逃げ口上であったはずはない。忘れ得ない、

強烈な記憶として刻み込まれた体験でありながら、それを認識に高めること、そしてそれを表現することの困難をそれらは物語っているのである。中軸となる内容は、志津堯志の二年半の経験を、志津自身がその中においてどのように生き、どのように受けとめたかだが、表題に最初から「記録」の語を選んでいるのは、事後における弁明でないものを目指す思いからに他ならない。綴り方風の体験記録に満足するはずがないことはいうまでもない。

登場する人物は多数に及ぶが、組織としての日本軍の、志津にとっての当面の頂点、中隊長・谷永大四郎が副主人公というべき位置を占めている。並み外れた長身、経験と経歴によって中隊長の地位を得るに当然の人物だが、彼の人並み以上に優れているであろう力量、能力も、ついには日本軍隊内で完結した価値体系、組織原理、行動様式・慣習に、個人的な価値観、私的な欲望を融合させつつ、自己の振る舞いとして肉体化させたのに違いなかった。谷永は、「新品の」「見習士官」を自己の流儀に従って仕立てようとする。彼の主観においては充分好意的であり、厳しくも、優しくもある教育的な振る舞いで、軍隊の幹部候補を同じ価値感情の同じ価値体系に馴化させようとするものだが、日本軍隊内の価値体系の完結性を根底から疑いつつ、いかにしてそこで自身を立たせ続けたらいいかを生きる意味として求めている志津にとっては、絶えざる闘いの的、理不尽な現実を象徴する具体的対象に他ならない。

志津の上官、部下等々の兵士たちの人物、人間性、人間模様も精細に捉えられて行く。

一方、日本軍にとっての直接の外部、戦闘・敵との対峙に関しては、匪化民、共匪、その連絡員たちとの接触、遭遇が様々に取り上げられる。捕虜の惨殺、生体解剖と呼ぶべき日本軍の非人間的戦争犯罪行為も、志津の動揺や怒りを描きつつも、作者は精確に、冷静に書ききるよう努めている。軍隊内での、兵士の頽廃が、内部の枠組みに守られて疑いの影のない、平板な明るさとして実現してしまう姿も捉えている。

他方、惨殺される匪化民や連絡員の側については、対峙する敵との向かい合い方として、むしろ人間的な崇高さ、威厳が貫かれる姿を明瞭に描ききっている。後述するつもりだが、エッセイ「英雄はいる」（「新日本文学」一九四九年二月）に記された子どもの姿とまさしく重なるものだ。これを貫く一本の線として「芳蘭」の伝説がある。伝説は、作中で小柄な女性として実際に登場することになるが、「マレイ・ジョホール地区共産遊撃隊指導者」である。この遊撃隊との関わりは、軍からの脱走者一名として小谷五六が加わったことが「芳蘭伝説」の「〔蛇足的おわび〕」に

あるが、「島」の末尾に、敗戦後の脱走者で遊撃隊に参加した者に名和節夫があったことも記されている。両名ともレムパン島抑留者の一員に含まれているので、敗戦後に隊に復帰したものと見られるのだが。

敗色濃厚な時期の学徒動員、劣悪な条件、そして飢餓的困窮の中での兵営・抑留生活、そこで見たもの、経験したことの精確・厳密・冷静な記述、戦後社会へのそれらの定着、このことなしには志津堯志の（そして、作者亀島貞夫の）戦後社会への着地は完結しえない、そう思われる。

各篇の主題と見るべきものは、それぞれの表題に象徴されていると言いうるが、これも後述することとし、ひとまずは、「赤門文学」に発表された第一作「白日の記録」が、序章としての全体的概観の役割をもち、以降の各篇が焦点的な話題に集中して、改めて主題を掘り下げている、とだけ指摘しておく。

注

1　会場は跡見学園女子大学短期大学部。代読は島田高志氏。会の事務局により原稿のコピーを見ることができる。その中には、講演時間の事情で、あらかじめ代読を割愛された部分も含まれている。

2　七十連勝を百連勝に改めたのは「この全集で訂正」（筑摩書房、第十一巻、一九七九年二月）、「新版全集で訂正」（「定本版」第十一巻、一九九七年二月）とある。本文校訂上の問題だが、前後の文脈を勘案すれば、安藝海に負けて七十連勝は果たせなかったという歴史的事実の注記のみに留めて、本文校訂としては初出本文のママとする判断も成り立つと考える。

（続く）

（くりはら　あつし・実践女子大学教授）